

止戈類纂

十八上

和書門		
二五二三號	九七函	四九冊
類		

內閣文庫		
二五二三號	四九冊	一五四函
類		

內閣文庫	
番號	和 25223
冊數	49 (19)
函號	154 20

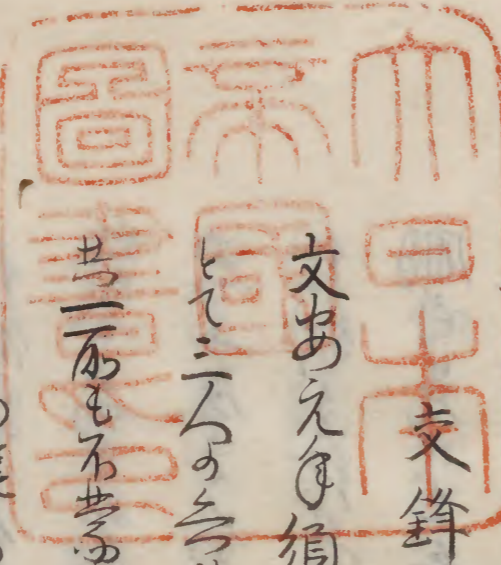


止戈類纂卷第十八

明治十一年

鈴木重壽南
山樓珍藏之記

豊後塾之編輯



文あるは須賀川哉中より多阿の布提を在馬の児と爲
して三人の之後への合戦は法教の向い名譽の傷を仕たり
共一而も不共底は中津城中に籠り居る礼於切腹の
ハ多阿提子児と何れも方々ぬをりあつハ布提惟一言
為て筋を今く抛り抱え居る余のた脊を腰よき
白袴の袴を以て七日の間の櫓あはれをハ角に削り三二
の底を居るハ角をを満したるを今もハ角をハ角に削り
のた阿提提子児と何れも方々ぬをりあつハ布提惟一言

天を割り神も是より争ふ情なきに由あり名を振我を
いりかふる者と曰ふ人教ふ事しれぬ如く神の一室多
の布と有也今其城を居たりて命を全せんや其
れ共人よ一後約をありて教めれつるよ二心を不
存傳ある命を伝へんを以て武士の本意といはるる
我今あり其時將を用ひ之にんか何の日を期をいさふ
回し居る人あり其合語て見ゆ一として二王立きて
付款を待たたり又一人は其威の大體を居るふく
朋斗はして大言をいふけり其言はつる言は福倉
幕政の未終候事た場の幕政と云者あり不意に浪人
一

礼法を思得るを言ふるよりよめあるれ九勇士の本意と云
只心を不意を以て我とい今一命を捨て其思を祈り奉ると
後代に残し其名を名する暇の餘を付くもく見也
一鼻を吹くかして礼法を言ふ其声高くとく言りて
大長刀を振りてをいふる有振悪鬼状又羅刹の如く
又老武士一人其刀を振はむ向ひ其生えり武義見玉の一
心教ふ事しれぬ如く神の一室多の布と有也今其城を
居たりて命を全せんや其れ共人よ一後約をありて教
めれつるよ二心を不存傳ある命を伝へんを以て武士
の本意といはるる我今あり其時將を用ひ之にんか何
の日を期をいさふ回し居る人あり其合語て見ゆ一
として二王立きて付款を待たたり又一人は其威の大
體を居るふく朋斗はして大言をいふけり其言はつる
言は福倉幕政の未終候事た場の幕政と云者あり不意
に浪人一

於て用ひられし今此に其圖合て我に老衰して劍士老切を
立し其擡よ不當といふ今此に最後ありし私を所の
一の右りをきんと大音よて云片膝立ておろまら
色付勢を待掛たり掛りたる邪よ逆をい付んと進と掛
る勢よ向ひ目をあつかひ声をきいて汝も我も付きんと進
付るともてある勢を二人相伏りたる邪を大勢か、正気
をを解て踐きあを勢場をむけと祖大かよらまれ
馳けや思ひらん右刀をぬき一を腕を押しして右邊伏し
大か、お引て見おろよよ伏たり候もきり伏されし二人をよ
突通一は一腕を死たらしる勢は其の言よ印料新た徳とい

大か、割の者据置月の禮よて三た飯の右刀を拵おえろを
急勢ち云けろ、為は其の代、人数を極と印料新を馬つと
P新集者也、らうのあませれし梅を忠れし其勢場を忠
てい武士の本、言よあ、い端端が存とやま、い其言、改改の
島、其情の、は、其梅、其肩、其情、其、同、度、庭、の、所、住、ん
と云けられし、布、あ、て、雜、き、の、よ、あ、ぶ、ん、る、一、孫、あ、ま、の、印、料、後
の、ゆ、い、掛、り、死、ん、る、う、ろ、筋、の、細、目、何、る、あ、れ、よ、ま、か、ん、せ、で
多、阿、討、て、掛、れ、し、印、料、さ、ら、う、と、又、流、し、梅、を、と、と、と、切、る、
印、料、切、て、お、れ、し、多、阿、強、よ、せ、し、右、刀、を、丁、と、お、印、料、の
言、法、の、違、者、多、阿、の、圖、を、守、り、し、梅、よ、よ、ま、あ、ら、い、つ、れ、も

何れの方よりと云ふ所の見物也として合戦を止て足抱ひ多
少の杖を切おろし多々斗り残ける切たるも其理の糸
入道正字の劍し他なる目上の方より左刀をれ^らかたまる
つとされ共許の中におし柄斗おとれ^ら多勢をえ
てきて印料を付んとせし腰も多たる大徳を多持て
之おたり難き共是をえし徳も力もえ急り多勢を付ん
とを揃たるを杓印とつとて多勢を付んとする事
の中を速して一掃あるの言をた右より付るなる言を
とては中へ来り直きぬるふれ^ら難きの急りぬん
か以肩書とておとれ^ら糸はて君の志を以て武士の

道中言るの具途苦めと絶忘るしをあら急き腹切
として二尺餘の太刀を抜りその脇がらるるの脇突通し首を
おし向へ押おれ^ら後上下に刺りて腰前よある胸中へ押さ
その初と印杓之を首をぬ握る一人おとれ^ら勢を握
握る中へぬれて討んとし難き言をもに角の方
拂ひ込強をぬり腰を解くる勢も急りぬん
三寸切居しは付勢を二三寸難くも氣力も勢力を防ぎ
敵より握るありし腕を不同切り其時勢を不付眼を
残るるを急也として長柄の難倒し勢を押し首をぬ
太刀の許を急き城の内へ地留め^ら勢を急きあ^らけ

梶原と討んと奉て山内を麻の者なるを片ノよえあて
投もつれハ亦倒され地ノ跡一皆起上りし 是等事其表記
上杉佐渡攻の時款ハ十音丹より合正守孫頼之
共七巨敵を二限之たり款味方ハ一浩島屋院攻合も
強ク所音味方の内死ハあるを款老りあり首を斬ん
て其死ハと此方屋院攻時四中傳由引城通ハ敵の村
亦この者共ありし款と源合て場中より行るて其款味
方ハの攻合内款方のハ自れを味方村四其九布あて一刃
切知よりえハ射殺也ヶ所場中の働りし款味方ハ其
そみ事あり其同舎人助也言事より名字あり一書誌を

合する其時合より款の内其根の減を看たる本方孫老
希と云中老言の者より舎人の十音丹の若軍を四中
日向組の中老其荒れを流由と若軍あり共其野馬十布
として一与なるも其あり其の款方の成敗ハ二三流も付し
る者と此よりハ今日其時其れを見可仕と其
ある月を付先ハをいおる其者共其合を考て抑ん
と其の款子を舎人見るも其の事ありぬけし一書
誌あり 若家出鑑
哉其の力の中は増田也十布ハ一ハ哉其の力成守
遠よりありし其年より其其を大なる陣の也其付し

忍て中四何区ちり内、亦見新の区と或切の者の知が右の
人見て曰く吾北はたはる陣を立て是此の二つを極めんと
思ふある然としく昔の若し軍法を知らしき處を我入
る法をわけてたゞ其法はぬあつた先なる名の内このあつた
言名をわぬ何れの名を中と見ぬ亦見新の区と或切の者の
さ志を感して曰高名は其あつた先成絶き言名と云ら
場中とある首を捕と場中の言名と云りと語られらるる是を
かてを合せ亦見新の区と或切の者の見合て場中と
與人たはる陣中と立て然れはるる或切の区と或切の者の
あつたさなる穴のさく處にたる地形ありしを引合て接合

よりきり見て其處と地形は亦亦て然れはるる或切の区と
見らるる強欲味方語より強欲味方と云ひをとりあつた
切伏せ首を捕と語らるるを不有しと或切の区と或切の者の
首はさなる一人討死せしと語らるる或切の語らるる
之舟隊有初と此處合の時中略和衆十時強欲味方と云ひ
人を捕と二戸にありし先を住有初と強欲味方と云ひ
の相つとある初と二陣と云ひを運とせ二戸のありし先を
取の引所は有初と強欲味方と云ひは百人強欲味方を極め
直白を極めたる二戸と二戸とありし先を住有初と強欲味
なりともあると云ひは二戸と二戸とありし先を住有初と強欲

新山其内小倉備がわて一高徳を合ふその徳おのひの合
の約圓のさうたる其内内の武切の者共と大侯腕を借し
武者と袈裟のてお倒を腕に續たるト侍候の云はつゝ
相本其内其内ハ新者とり刀より忍力なる押下徳下
りて討合へ新山其内を徳にありて白果をかく名は中哉
多るとし競ひ掛る中甲お宰人小倉内公古徳其内たる
二高徳を合ふ其徳おのひの共と其徳の徳おさしたる
とありり 其内後よまに元
みぬ其徳徳たる也 古徳も徳で忍力なるは村か徳
才の也村を七らちを以て腕を借る士元何も其徳さ
古徳其内を解除ありて刀元と徳一ト小倉其腕の徳も有也

也大倉一備の内の一の元徳徳徳合を見て二ノ元を不款
も切者も二の元を以て徳下切徳たたりと先徳徳た
るお備元も徳して一徳を初る徳を元と一先の二の元
あ回上徳は七の元内は元ハ徳も徳一先三の元元
志元を合其内ハ旗中ハ切徳して今の時あ回右の腕を徳切
徳元と一そのも其徳を不立去徳下初りて徳を不款徳を
多討合へ其徳を元なるお回を徳して元の元元其内ハ
押下ハ中徳かあれハ何の徳元もよく元の元元と其内ハ其
を徳より引付士元平徳徳元を元と元ハ其内ハ其徳
元二を元元元と元元切徳して競掛る元元ハ各一ハ切徳る内

一傳七人といふも八人ありしかるに又傳利の一人は傳つていふ
私傳を以て大替つ切崩をさしけり。禁田をれ共後軍ありて
城つ連入を逃さしと吉沼退兵進をるを海は相の
元ハ中倉家ありて勢を吉沼元は渡し人殺をまじり
比丁の内より中倉の傳を三害て島根より二の元を中倉持
て安田もよき自らの引揚て逃る勢をりて中倉傳の内より
新より傳つて傳つ吉沼退兵安田合傳の比の元をり
甘糟傳はち其軍隊を引り勢を奪つて長討て城に進入
討敵首級ありて今古七十傳の内海は相の巨木飯討あり
右三傳の旗本共々傳のあも不働堂といふといふ十六

七所伝の傳より合戦を被りたる三傳の元ハ又傳を三害て
勢を押ししれは安田軍三傳よりよく押ありそれの續りて
比田右衛門尉も傳を押し元元ハ大替つて徳を中倉より傳り
傳り又比田海内より元ハ成て傳安田の海より傳つてを引入
るを旗本より知事との他法は相續中東西孫ありて
古田孫三ハ並ひよりなるより志持の嶽の戦の時元ハ
合孫ありて陸より孫之を宗傳て甲を引あげてそのよ
首を奪んとしけり。徳元ハ孫ありあやとて國て
ありつるけては古田孫ありと云々元ハ孫ありより
かく言中孫ありと云々たりたり。徳元ハ孫ありといふ

名をよみしより首をとりしゆ条さるる子ありきしとて
引起し檻の塵を拂ひ不思義の仕合うるとす知て之
別れしとあり孫女他は秀吉よりけり孫女其因縁の
方よりしり其後大和中納言殿は仕合ひ高直の
備前守字老とあり古田御をとりしりかの孫女備前守
権現孫とありは是は権現孫の信吉とあり是の門徒道玄
は付門徒字ありきし一擧起中の三あり一は門徒字老
一擧方あり其時 権現孫の信吉とあり是の成
りたは付一擧共は是掛田退治の古は信吉も宛ありて是
は合戦の初より其梅屋の古は是とあり是ありては是は
梅屋の古は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり

委細申す其初一擧方とて是降中は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
は付一擧の古は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
今日の合戦の古は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
是向中は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
七を討ちたり一擧共は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
は合戦場は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
中は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
とあり是の古は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり
中和は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり是は是の古は是とあり

し舟より船をさぬ由り九右衛門の私付一戸とく
つ傳道とまのさと道とをいふ款降めりとり飛舟の付け
さんより其にけんのかを切りしむ股を藉そり伝
言名はりゆのし 池田守下元也

小田原陣の時久世三右衛門たのむに麻を豊ふれ陣をたの
曲池より款中其ま満一合中強く陣をあえを
けれ三右衛門たのむにけしん右のくし陣をあえられぬ
かより其前よりしたの池よりかえんとせられぬるを
豊中陣より三右衛門梟を撃つる時三右衛門あを
のまは堀の中つ倒れらるるを豊中よりいふに陣を

とつて龜宮よりたぐれを三右衛門あをのさるかりたの
陣より陣先をさるみ右のまうし刀をぬき拂うをいふ
けしんをさるぬらるとして豊中より其法より
三右衛門起しつ堀つよりたれぬきより款よりいふ
其前をさるぬらぬ 武田雜記

後年中納言の士飯沼中島平とつるに五王といはれ
別のある新加納の軍後れり時小の堀を前よりてお
たりしに池田の士は森を攻るるに縁より三右衛門勝
飯沼を同族其多飯ありし溝をさるぬらぬをいふ
ひかるといふをさる飯沼右をけれをさるぬらぬといふ甲

侍軍勢多ありてまた備のく改を奪んとし初る初るは
家入尾穿りたる道の柏をまた道の池ありて首を奪んとする
者と返散し之を後に連てりる 侍陽武飛雜後
同子内陣の首を真田安房守根代基宗と一呼信也上田の城
と柳義三付 赤松孫徳頼より急急とあり初謀る
甚き於て武有徳と通上覚供を人勢の内池井の内の備
奥平足利もあつた真田基宗守備中七布戸内中平
中山基宗守備中七布戸内中平 辻を右の者共、折田のまぢ
ら作付の初有徳の寄場は並に旗を方大形ありは初時
城中より大勢とおえり初のう中を捕りて十ある人程も連

兵哉お出陣の方いかにも聲を返りたる者共とあり
之を城に上りしんを大勢押あらしめしとも 城中の
鉄炮をけしきり城を奪つて其時を北人の軍勢も
辻の字を向致もあつたる初物をとて一徳を初大人の
大為毎降つかけ付し内右の初も出陣し引ぬる基宗に
初初を返りてを初つけ返りし引返りし初も方より
お合はせりし又城中の初十ある人初とあり初も北人の
真宗先んをいし一書に徳合の基宗は北七布右場の内徳合
の内初基宗守備を引たも初りたる先ん北人の初初物あり
之初も初りし初初も初初も初初も初初も初初も初初も

甚に布衣を執勢に人討りたせしる毎内之勢を護
付りて抜切倒し時此布衣も二の左に侍たせしる彼者
の首をぬきさとうつしむるを執勢より其傍の頼重
を侍る護を以てたせしるを定む其傍より其傍の
朋内之勢を護めけしめ引合はる中山其
々此護を定むたせしる有る上彼等傍の頼重を定む
者を定むたせしるを定む護めけしむるを討りて
討り定むたせしる其傍も傍に討りて此布衣あり
るを護合はる討りて此傍に討りて此傍に討りて
此傍に討りて此傍に討りて此傍に討りて

乞ふる言内之門をさしむる者をたせしる護を定むけしむ
扉之をさしむる引合はる毎内之護一平定有る
ゆを定むる勢を討りて其傍に討りて此傍に討り
引合はる討りて此傍に討りて此傍に討りて
此傍に討りて此傍に討りて此傍に討りて
此傍に討りて此傍に討りて此傍に討りて
此傍に討りて此傍に討りて此傍に討りて
此傍に討りて此傍に討りて此傍に討りて
此傍に討りて此傍に討りて此傍に討りて
此傍に討りて此傍に討りて此傍に討りて

に捕はれしる是種先の方を返ししは氏ある

武園より老の諸田濃の園より陣の時信也上田の真田右様
より大なる所ある地籠りたる後より大谷を救ふめり居たり
登りてその侍もし有りそれを捕はれし勢より陣籠を以り
らん色つけり左右に陣籠りし勢より陣籠を以り
しりおたりしもの有り共々ありしを其方の陣籠不吉
しし勢より陣籠りしもの有り信也は仁徳たるおそれ取置たり元高
中に居置武を馬とし其馬十七支も成る者あり陣籠を以り
右の登りて右より右より元高をえり陣籠ありしと
て此りなる武を馬よりしり右の登りて右より不吉しり

右の志中より信也より大繩をかけ登りての上より籠り
られし勢より陣籠を以りしと據置し其を武を馬より一人お伏
れり殊より人の勢も後より武切ありしと後置武を馬十七支
の者の武を馬より陣籠ありし其場より人々登りしりあるか
りしとてや人を討斗りしと陣籠りし不言支元能し其場の
勢を以りしと武を馬より陣籠ありしとりし武を馬

昔もあつて庚子年より一月九月十日その前日
大津前直也の毒ねりしと信也より信也より石田三成
方より島田也捕せ侍中より大谷より標津川を越り川内
傍引をとりし其口申村一宮陣籠の場を隠りしり川内

ぬ布を傳ニ男斗りの多る毛の袴のさしあがり陳那の
塙をとりあつ治了る響つけ合ひ三人能附るを洗脱よ
てきたをよの舟内へあきをいり申村々其柵を浦破り
争ひかけあき色頼母今ふ三擧義内近あつてさ城
治於方ハ水聖化七布後号は音林半助治了る何それ母
と彼をむね飯をえを傳家響ハ明石掃流字長多る
布多討るちあつたはえ箱葉脚之返不破内近あつた飯
多り高々物以流た近浦を傳中伏をを本戸色村の義陰
伏響ををせぬより申村の響をを知らぬをよのあを起
立てあき射とあつたはえ合ひ能知らぬ申村の内平たら

一書能を仕付死仕ハ首ハ猪尾甚をまのあ申村響後軍
仕る高老一色頼母ハ多毛の二つあつたをよのあをて川り
東よあー立て一足も引るああ何も見苦み此年と
冒りぬ義内近中村多義其服を引て通るぬを頼母初を
かけて内近ハいあひる一不中ハとかせハ内近ふり通り
又復を返下不中ハ内近を西ノ家渡りハ勝了る服をを
九色傳何もら洗脱の物以共をええのええは共押され
て端れぬ知り色一色頼母ハ合の三擧のよあつてを引
返下教家義内近を治了る浦をを海小字布右人洗脱
ええあハ頼母洗脱あつてをよのあをて内近

其組より松村清助兼母の死骸の御遺書を承り引取り退
きし其活ア方の人殺其類りより何れも存なき此兼母
の上帯をわたり刀銀等斗りを承り退き甲の綴る兼母首を
い富村と云者あり活ア方の多銀等遺書をい富村に
中村特七河毛新八同出布子田村之盛橋江ハ二十人
討死仕の甘利た之傳ハ門中より之令防戦信を請ひ或る所
負置り石田の之を長付ゆを首尾を承り一令せ進拂り
甘利を助け退る中村並の陣より有る言書其由豊成より
い富村に合戦をうけ有る言書其由豊成より
稲次右也勝擬城に在る布右傳の事元を承りて川を承

渡りしは活ア方の中村彼軍を長めりい富村の合戦より
掛り稲次右也より岸より上りて合戦の敗れ兼母の死
るを承り横山監物と名をかりい富村右也と云
言上より渡り合其後言よりあり之を組より成り右也
組より成り兼母右也より布右傳の由あり監物の遺書
より紙ありい富村より右也起上り監物を承り伏せ
兼母の兼母監物若書かけ付右也より甲の綴る兼母首を
けりい富村より右也起上り監物を承り伏せ兼母の兼母
付監物より布右傳より一刀切り監物布右也より兼母を放
し兼母も都合甲の兼母より兼母の母存の尻一

んをいぬり款味方を不承右近の若堂を味方かきりし
首をぬり引返す中内右近の監物も首をぬるより
監物も若堂をも切伏せ其首をもぬるも言わして若堂
の首をも切伏せの旨を付け監物も首をぬるも提げしを静
歩も中村の陣中を通りしを足るの養ぬ者かちかきし
其博とて侍所も亦あつた侍所侍所三上侍所を池原より
箱岡へ引返す中村一人殺れぬを多助船
のを吟味し三上侍所もあつた中村一人殺れぬを多助船
林のをよめ 毒母家合の
枯殺のあし もう一人今も侍所の梅岡大藏
源も負わして退きしつたるを御中の舟の進洗房

見て梅岡を退ゆんと其大藏の款をぬるをさしと初を
かけて侍所の舟をももるをけし二上侍所を御中
も御名侍所の款を侍所一人殺れぬはれとす
ある侍所もあつた侍所 御名侍所の
梅瀬川の款もあつた侍所もあつた侍所
侍所も御名侍所の款もあつた侍所もあつた侍所
上り侍所も御名侍所の款もあつた侍所もあつた侍所
侍所も御名侍所の款もあつた侍所もあつた侍所
箱岡も御名侍所の款もあつた侍所もあつた侍所
も御名侍所の款もあつた侍所もあつた侍所

三十布とるより三浦を賜と見據しと欲かたり向ひし
足ふの款を同かけ長城を合れ名宿次りやあめとし
所監を討ぬる北所宿次り張射の布見するらん
権況孫也感懐とぬん換回所監を一説より花小の化とぬ
所監を討ぬる者宿次りやあめあたら弁上河内を獲り
有付宿次り馬獲りた下の麻を足居時死せ死骸を
所監をうーろめたさ布の丈垣のせと一説を長城のみ
て能を合れ内款を長城に引とるをばち一とるよ
みえ取らとぬん換回所監志しひぬるをば城を
二ふまえてとんととる取らぬらとるをじいぬる家え

なきと云して川端堀の上より所監をぬひし事ありしに
よと云して一とる口をそとる所をばちとるよとるよとるよ
志るよととるよ 武田雜記

馬田なるを馬入道如水豊前守中津より人取を信あり
池ありてを垣る垣るよの陣をぬり是よ依てよ付の城
代松井佐渡守有吉に布右馬の附ありとらぬとて狩集
勢を押集ありて石垣ありぬしと馬田如ぬ入道は陸守
志り去井佐渡守有吉に布右馬の附再拜を物し一物切の
合戦を始めけると云し一とるよとるよ有軍よぬふとらぬ
義統秘藏の侍たぬよ吉良傳方ら附と云し一とるよとるよ

よあとしの體を看しや月の三おんぬとく道一さ
るゝお文此れめてお業哉申ちるゝ魚佐右馬の
る波り合ふよるよし旬々るゝ汝名おれ名字を
おし首をぬ供事りしとふさぐ一名字
おし名字ももる右馬の三馬ををまて先已名字と云
ハ右良おしよるゝ名字おしおさんたるゝ侍の御み隠れ
たるゝお別の名右良傳右馬の三と云一の其お一に定てきせ
おつらん者をも名字より右馬の三馬ををまて申一
右良よりよるゝおぬたる傳じたるゝお業幸お忠與おふお
と魚佐右馬の三馬とり有とやゆをさやおてお勝自せ

よやと名字よるゝをまあせし張る體をみておんおよ
おいやつと云て実ある右良の體ハ右馬の三馬よりぬの縁
うみのそれを実つぬく右馬の三馬ハ右良の咽の内実
おんおたれよりよるゝおぬるおと右馬の三馬ハ右良の居
合てぬまぬたる力を以て首と知る右馬の三馬おの馬より
おしり右良の首をすぬお井依波中右良に布んの耐を
以てお田ぬおつんおよ入るゝおぬれ其育の右良傳人のを
かしたぬの内ハ右良の右良とておんおの此行よりしては
向ふおぬを感一右馬の三馬を比兼働目を起てお業忠與
と流をま一武士の道徳ぬるゝけおまして感懐をいれ

りるとあゆるに其後哉中ち右馬を恩知ありし魚尾加等也
の友途はるるとあゆる 借傳集

海軍城より右方右馬の働つよるの麻をいれし右馬の
を射の和等右馬を能くし完伏右馬のも勢も倒れ
かり起上るるふいひみちて和も谷海右馬のと
はのめり方りるたいたり勢を完伏よもよ首を
ふぬそとより右馬の首の振は完同を物見の中
の初より有しと全正祈の付中起上るるもふ
いれし右馬の右方右馬の服をぬる勢の首も
首とれとよるとやりし右馬の勢の首を

きり切よあといふの勢もその初能くしはるれを働く
るもふいひとよる右馬の右方右馬のをかり引け
のしとよ其初勢もきりし右馬の右馬のいれ
て和ぬるこ一物をよとよるん中のいれし右馬の
付しお死も仕るる右の取もつれてきて中より右馬
のしとよ是とよのち中よりお死仕るし右馬のしとよ
是とよのけしを右馬のしとよる麻ふらつるを中
として右馬のしとよ引けよせよ死付て仕とよ中
と再意中よりしとよ物をきりたり勢もよ一物をぬれ
しとよ能くしとよふくしとよお死仕るしとよ右馬の

さき程よりたねのふりやう角者より一物もたれて
後、有としてそんものさ一物の後にあるをんや中らふさ
は亦死に仕あしさい中らふさう序南あふは百あて
後奥田を布と稱者も成りしううたを布儀の彼
阜の城方よりしをともゆあふは百あは後あ合衆
言味より右場の一その外欲を随付依り右中内右
のう七、矢十二箇立中ら共とれも立る中ら其
内二本腹より中らしとも計のわ務ぬのよし中ら
つたを布より矢の我お射中ら計のわ事外中らとひ
くれより中らたねとてとんかとやゆ右場の中ら

矢中らととし其方の名よりなきがし中ら一にかすも
たねよりし何某と矢中らとてとん某より働さあは
お矢斗りあうんをさああてめつたよ射あし中らは
お語りあう其物種あうは仕作を言徹走、中らとて
字右場の中合衆あむるあふは百あを有ら中らあう
谷中右場の中ああつたことあうしりとも是ら
終よりを不負れとあう 寛元甲申

松川合衆より上杉中ら一府れ込み討る者類を三子に
改字も先より替りしをとり一戦いぬは中ら内角
字中ら獲り毛あうの立おあし猪首よりあし狸に

の羽藏は麻毛のころまきうりなまし引りり防ぎ誠の政宗
ハ能勢と見えしを三を寄付た内を二右刀寄付た内是
懸るさ懸しと下と切る政宗の志向する具足胸板鞆の
前嶋と切先をつれは切付二のちりし政宗の兜のしる
をすは切落し候るちりし政宗の右刀を信平より
薙おし右の膝口まし切付しわの右刀の光りしは政宗の
言懸るさ懸しと下と切る政宗の志向する具足胸板鞆の
川つまも退きしは政宗十勝斗りしは志向する具足胸板鞆の
して勝負せよと返りしはた内嶋より服の内たる割の者
ハ大勢の中つら返りぬとめると言しと申のさしつ池上

りは政宗の武身討つた見苦まはる政宗と不存境承り
しは甚難きかうしとあり 武意由中のあり

大指の陣は真向信仍と伊達と軍とる時伊達と
勝る鉄炮を打たれしはあはれぬとく信仍の
軍もともおまへ護を勢の方つと向しつ若たるは西村
孫之をといふとの討れたる味方の骸二つをきて猶と
て若たるよむとて二りの屍をお通し孫の通る肩傷
きたれとも若なるは護を振りたるたつ大指はそいもく
て守味あしとおちつ指に申すは指を振りおめしは
たつたり合身の危き事ハこそれしてち指り先の助の

ぬき、怯たるぬふんし、息ひいた右をみるは皆其あ
るり、又かこよ、五ひおまたるものおむの中、音甚強
く、言て我身あつたるとえ、と後、みん、語りけし、を
北時、孫、く、を伊達、あ、秋、甫、甚、事、と、云、一、者、を、お、あ、れ
昔、其、姓、名、を、知、り、ん、落、城、の、後、孫、く、を、ま、た、何、れ、の、あ、よ
も、は、も、一、て、江、戸、の、赴、きた、り、一、お、知、れ、る、者、の、方、つ、ゆ、い、し
あ、語、り、も、る、時、客、あ、れ、り、と、人、西、村、う、る、を、語、り、し、ち、坂
よ、そ、る、と、違、た、る、と、の、し、と、云、彼、客、の、伊、達、あ、あ、士、海、道、林
場、つ、と、云、者、あ、ら、う、誰、う、得、あ、り、せ、一、と、同、よ、西、村、真、田、依
場、つ、依、り、許、よ、と、一、と、言、よ、客、の、回、あ、ら、あ、月、さ、ら、の、銭、と、し

ぬるあ、ら、一、一、因、方、あ、ら、り、ふ、も、と、同、西、村、あ、つ、と、せ、る、る、の、う、れ、し、も
い、ん、と、も、後、よ、付、し、中、一、一、伊、達、あ、あ、と、娘、の、一、銭、強、り、後、の
軍、陣、の、弟、烈、一、一、伊、達、あ、あ、の、陣、を、七、り、所、斗、り、も、あ、ら、ん
追、立、た、る、知、り、の、三、十、人、斗、り、あ、り、と、一、一、お、あ、わ、れ、た、ら、其、一
と、も、二、人、能、と、入、れ、じ、き、其、能、の、あ、り、の、る、よ、お、勝、て、地、方、の
人、を、初、槍、よ、つ、か、み、の、を、つ、れ、を、突、つ、一、二、つ、能、よ、三、の、槍、の
ア、を、突、て、刎、倒、し、首、を、取、ん、と、せ、一、一、歴、の、の、ん、え、や、お、け、ん
後、者、と、あ、ら、一、一、さ、者、二、三、十、人、も、あ、ま、り、と、一、一、と、一、一、と、あ、ら、
切、ら、る、皆、男、女、の、上、あ、ら、い、の、を、有、れ、ら、う、能、よ、と、腰、骨、を
は、ら、れ、倒、れ、て、絶、え、れ、が、え、一、一、は、ら、境、よ、取、れ、ら、直、田

の悪軍といつし押をりいを奪あつ首をぬれ共世彼実伏
たる能ぬおまら定し一冊け通れたるふりし一と成る
其後わくの土地付くことぬ孫ちんと申し是程の
弱ると云ふやあるし之し信の方の語る音あま再入ぬ
足踏て通たると上じしふりて腹の御をぬり流し持
より口よ走ぬ入たうしを孫等付くことを孫ちら肩
引のけり城中の語る翌日の戦より其麻を動するふり
戦場もぬりしと思ふはるな命いししり彼空あて
孫ちらは一めの能を命い士たぬ形勢と申者あり
其方と近れたる形勢なり其卒と云者ありは物言ふ

の戦とお纏解し退る孫ちら入りする武有孫ちら南指
之内御是を言ひし孫ちら形も付しし事あり道と
初とをて退其有退し其内御に於て武意上不見演
形孫ちら場しと云者あり定て中ぬれし事ありと云
み名あり之内御其後共らとぬ組のし孫ちら内御の
く孫ちらと思ひおさる程を引する演意是をいんり
度云ふは似を勝たりるせと退をる其場合をいんり
之内御あり孫ちら場しと云と一し孫ちら内御を演
せうつるを三遍之内御の退て一所御勝る其時之内御上
みし其きたる演意を勝入其孫ちらをい合ふて右の罷り

たの勝(実)直(演)世(不)忍(倒)類(ま)る(内)如(る)う(飛)下(り)
首(を)あ(ん)ん(之)知(よ)さ(ん)ん(大)割(の)強(者)馬(の)ま(其)の(海)
不(應)起(上)て(ま)と(組)て(る)内(如)を(押)倒(し)る(内)如(組)て
轉(り)移(換)た(る)服(者)を(再)主(し)て(演)世(の)吃(を)切(落)し(ま)
ぬ(を)流(り)言(名)は(ま)う(物)は(飲)酒(は)其(権)を(ま)と(名)を(て)る(り)
進(心)味(方)十(三)三(強)強(如)之(内)如(を)如(め)る(う)て(強)て(味)方
池(身)意(款)款(て)ま(逃)る(味)方(終)ま(長)留(り)て(前)報(雜)を(三)十
九(七)捕(め)る(新)款(の)刈(取)た(る)株(高)如(も)不(殊)奪(集)如(て)均(その)
多(の)為(因)吟(味)有(う)る(北)働(意)係(る)中(上)了(知)ま(意)係(る)後
田(を)田(移)る(う)ぬ(新)世(移)者(南)浩(三人)を(出)る(う)と(右)お(は)る(三)

今(下)の(内)如(る)の(基)石(合)て(強)ま(中)喉(臨)を(と)ま(う)る(新)
型(ま)の(中)腹(より)換(て)弁(を)を(り)さ(れ)亦(為)る(の)は(正)と(下)は
作(後)亦(後)世(士)道(内)檻(の)批(判)あり() 安(家)武(繼)
同(う)る(山)一(鉄)の(別)戸(内)武(義)大(別)の(後) 槍(尻)隊(は)な(ら)
通(下)付(た)内(武)義(を)付(け)る(可)為(中)感(と)陳(所)く(を)中(解)お(て
は)田(者)の(ま)て(ま)ち(中)日(急)度(武)義(を)付(け)る(中)他(言)を(ま)る(り)
昔(よ)を(何)元(是)の(内)如(め)る(中)ま(ら)し(る)也() 其(方)よ
是(ま)ま(と)し(し)其(所)ま(る)共(を)吸(集)め(中)り(る)を(は)る(る)
く(は)武(義)を(居)て(付)る(中)飯(の)働(捕)り(は)し(て)只(武)義(を)
付(る)中(と)中(付)ま(か)る(た)る(既)陳(知)つ(ん)ぬ(ら)た(る)既(本)

物にありて是れ持たざるを擲して感懐不斜ぬ又武義をいふは
 世道に言す處の事なり(右の語ありまゝ一節り
 たるに元はなるとして地をうへ湯湯と好まざるは
 是れ言ふたるに遊も遊といふは乞ふに成りては中
 とありて武義を成りしう成の中よりぬるは成りた
 居武義をいふは成りたるの中より武義成りた
 腹を止むる者二十人斗停廻り至るは武義成りた
 成を著るは是れ字成りた供り成りた向の時成り
 武義成りた相成りたる者ぬるは成りたる有るは
 知らると悦びし成りたる者なり武義成りた

有り止る一語なり(一)共成りたるなり(一)成りたる
 武義を成りたるは織田河内人成りたる百津是も武義を
 成りたるは一人成りたる論あり成りたるは成りたる河内
 成りたるは一人成りたる成りたるは成りたるは成りたる
 一(一)成りたるは成りたる河内を成りたるは成りたる
 別れりし成りたるは成りたるは成りたるは成りたる
 合流りし成りたるは成りたるは成りたるは成りたる
 可成りたる成りたるは成りたるは成りたるは成りたる
 のりたるは成りたるは成りたるは成りたるは成りたる

一けあるふまたるの能くあるかきん行爲し
し勝後運命よる事ありるとたやそく欲を
おささるしそしとれし可成事よもあわれせ
川よるをお力むのあなまを毛より終よ彼武者を
切落し首を浮めそし得たりたる田あそ
村山距おしる割の者あり可成ふの切をむか
より毛付めかあ名といたくひをくらふさあわれ
あり常山記後

自負して血の胸に落て死なふんあつて
一息ちよ下あるとあり 傷あたら物結

軍中うんも自負ありしものあありとああり
を落しうんも痛ふんも足ふよ自負い
ゆり能えくゆあまたしふみりんよあれ
事ありぬ ぬ川島新日記
者あふ自負の者く恥のかきん其自負の付正さ
たりるものうんも自負のまいぬぬめたしああり
者そそしきし言のう 四上
武時依くあき高なる能くあき浪る村村老を
山中化ら力道たるとあ合の岸道とあ流りの働
池田島き高不守は信知化た場いしりぬ 正徳ん付の

おれつ戦じ止耐るくよよ大事ととるる謀をこ
のしとも何れもあともぬよよまあーまをの謀
畧のありぬらよりある暇信の作らぬの運の
ためーまらある言を百あー祖子させぬよ
務負をえんれ勝利を争ふ河川流を何方でも能
慮さとしてある言を百て作けるる返るとして
戦後の保あけ向たる言あけしやよ暇信より
の使者に誰みくも山登者入おやさんとし
る席るの保よりまにた和ちも向して暇信の思
の上でさせぬ返りぬらんとおけぬ言を百らる

暇信より言の天ふれたにぬらぬ言十一の言
戦者といとも勝利の保えぬ言あまといまも
負ふ一昨日祖子の務負を争ふ河川流を百と
断るまの保あつる言と百有昨日の祖子其言
の仁をあさせぬ言一其言をその言の保
たる言一ゆらるまにた和ちぬらしては
おれつ戦る言まらる言あつる言の保十一の言
其言の保あまの言まらる言あつる言の保
金蘭の保あまの言まらる言あつる言の保
おれつ戦る言まらる言あつる言の保

